
大華戦記

土竜兄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大華戦記

【Nコード】

N29970

【作者名】

土竜兄

【あらすじ】

架空の歴史設定に基づく東アジア：大華。

20世紀中葉、日本列島、朝鮮半島、東北アジア、琉球をまたにかける大東洋皇国は、無為にして絶対なる君主、天皇を頂点とする世界国家の樹立を掲げ、大陸北部の中華イスラム共和国や、南部の新興社会主義国家・華南民主共和国と交戦状態にあった。

勢いに乗って戦線は拡大する一方であつたが、裏で皇国の唯一最大

の支援者であつた米国との友好関係が失われ、戦資は次第に困窮しはじめ……

さらに、相互不可侵条約を結んでいるはずのソ連と華南の結託や、東南アジアの先進国であり、皇国の最大のライヴアルである大京民^{きん}国が米国に接近しようとする動きを見せていることに、東京にある皇国政府は神経を尖らせざるをえなかった。

そんな中、皇国の精神的中枢たる皇宮内で、こともあろうか天皇の権威の拠り所であつた三種の神器が盗まれるという事件が起こる。

犯人の思惑はただ一つ。それらの神器を彼が正統な天皇の後裔と仰ぐ少年に奉還することだつた。

一方、^{しゅう}齡14の皇女、彰子^{しょうし}は、国家のためでも、王権のためでもなく、ただ自分自身と家族の命のため、神器を取り戻すべく旅に出る。

架空歴史ファンタジーここにスタート

序章

皇紀2600年8月5日。その日、宮内庁は騒然とした雰囲気
に包まれていた。

「神器が盗まれただと」

宮内大臣 源康時は、普段は温厚で口数の少ないたちにもかかわ
らず、この日ばかりは大声で叱責を繰り返さずをえなかった。いや、
あまりの異常事態に、何かを口にしなければ頭がおかしくなってい
まいそうに感じていたためかもしれない。

「はい、三つとも。三つともでございます」

長官の李光輝は目を伏せ、内心平服せんばかりの面持ちで答えた。

「しかし、御鏡も御玉も御剣も、別々の金庫に厳重に保管されてい
たはずではないか。ナチの特殊工作員でも開けられないと豪語して
いたのはそなたであろう」

「それが、一か所に集められていたのです。例の博物館公開の名目
で」

「ばかをいえ、一般公開には贗物を使う予定だったではないか。鑑
定士の目もあざむける精巧なレプリカを作るために少くない額の
予算を費やしたのはお前が一番身に試みているはず」

「さよう。しかし、何者かが知らぬ間に両者をすり替えたのです」

「では、いま地下金庫にあるのは……」

「間違えございません。すべて紛い物にございます」

「陛下にはもう奏上申し上げたのか」

「申し上げる以前に、解決いたしたく。それが、大和心ある臣下の道と心得ます」

「長官どの」

部下の一人が慌ただしく戸を開けた。

「無礼者。ここは神聖なる宮中だぞ。礼をわきまえず、いきなり戸を開けるとは何事」

「申し訳ございません。ただ、依然副長官どのとの連絡が取れず……」

李長官が疑わしげに眉間に皺をよせた。「それだけか」

「いえ、これは噂にすぎませんが、副長官が一昨日の夜中に家を抜け、横浜の港に向かわれたと。数人がかりで何かの荷物を運んでいたとの目撃証言もあります」

大臣と長官ははっと目を見交わした。

序章（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます
今後とも読みやすい文章を心がけて行きたいです

湖

ニャーオ

猫を追って入ったのは奇妙な村だった。

そこはどこか、今は遠くなってしまった故郷の風景を思わせる。

素朴で、懐かしい風の香り。

けれど、茅葺屋根を黄金色に染める夕焼けは西の空で真つ青に輝いているし、

雲は高波のように揺れ、コンペイトウのような沢山の銀河が、クルクルと無秩序に回転しながらその上を通りすぎていく。

宇宙と地球で風が逆に吹いているのか、雲と銀河は反対方向に流れているので、余計に速く映る。

不意に、一つの銀河が、流星のように真つすぐ、その星の、その国の、町から数里ばかり離れた村の、外れにある通りに立つ一人の少女に向かい、地面から彼女の身長分だけ離れた位置で二つ並んで空に向けられている瞳めがけて突つ込んでくる……

が、衝突の寸前、彼女の瞳に宿る魂は光よりもうんと素早い速度でその場を抜け出し、一瞬のうちに宇宙の果ての果てを超え、別の宇宙の外れにあるちっぽけな惑星の……の……の……の学生寮の個室にある寝台の上で安らかな寝息を立てている少女のもとへ帰っていた。

彰子しょうじは目覚めると、まずうーんと伸びをして、時計に目をやる前に久々に見た夢について考えた。別に面白いわけではないが、異世界というのはそれだけで魅惑に満ちたものだ。しかし目覚ましが鳴ったので、睡眠と起床の間にある微妙な休息時間はすぐに打ち切ら

れてしまった。

仕方なく、彼女はこれから始まる一日について思いを馳せた。ついでに、昨日も同じことを考えたことに思いを馳せ、そのついでに遠と日も同じことを考えていたことを思い出したことに思いを馳せた自分が、また明日も、同じことを考えるであろうと思ったことに思い至った。いずれにしても、最後に出るのは決まって早朝一番のため息だった。

いくら思考回路を無限ループ様に張り巡らせてみたところで、時間の矢はそんなのブツギリで明日へと、そして最後は死にまで続く風穴を時間の壁に開けてしまう。その向こうに見える光景は、とりあえず後になって起きてくる寮の先輩のために眠い目をこすりながら朝食の味噌汁と肴を焼いている自分自身の姿だった。

かくて、単調かつ億劫な、はずの、彼女の休日が始まったのだ。

湖

休日とはいえ、外出には制服が不可欠だ。彼女は萌黄色の小袖に身を包み、学習用の硯箱に教科書の代わりにボールとラケットをつめ込んで寮を出た。

部活を口実に、先輩たちと一緒に朝食をとらないで済むのは唯一の幸いだ。たったの一年ばかり長く寮で過ごしたというだけで、なぜ後輩に対してご主人さまのように振る舞えるのか不思議でしょうがない。自分も一年もたてばあんなふうになるのかと思うとぞっとする。いや、そうはしまい。

もつとも、もし彼女が自分の正体を明かせば、先輩たちも態度を一変させることになるのだろう。「テンノウ家」という家がこの国で持つ権威が並みのものでないことは、社会から一応切り離された学舎生活においてすら、新聞でもラジオでも授業ですらいやというほど頭に叩き込まれている。その一員、曲がりなりにも皇女さまが一般の学生に交じって、おまけに意地悪な先輩の家内奴隷扱いされているとは誰ひとり夢にも思わないだろう。

そう考えるにつけ、皮肉な笑みがこぼれる。そもそも、こういう生活を願ったのは彼女自身のはずなのだ。

城壁の向こうの、広い世界を見てみたい。それはずっと幼いころから、内裏で幽閉に近い生活を送られてきた彼女のたった一つの願いだった。父である今上の君は朝鮮語なまりの拙い日本語で必死に臣下たちに訴え、ついに部分的にはあれかなえてもらうことに成功した。ただし、期間は三年間、全寮制の学校でなら、という条件付きではあるが。

自分の名前と身分は伏せてほしい、と願いだたのも皇女自身だった。きつとそれを知られれば、今のような学校生活は送れなかったに違いない。宮中と同じように、人々は彼女に対して見えない壁をつくるようになる。幾重にも重ねられる敬語ほど、人を疎外し、孤独の殻へと追いたてるものはない。

そしてその予想は、たぶん正しかったのだ。だから彼女は、一句すなわち十日ごとに提出するよう義務付けられていること細かな学校生活の報告書を記す際はいつも、悪く受け取られる可能性のある内容を注意深く省き、最後は必ず「教授陣の学徳深く、級友の余を重んじ、先輩の余を慈しむこと篤く、何ら問題なくおぼす」と結ぶようにしている。

彰子の通う学校は琵琶湖の東部に浮かぶ小島、多景島にある。そこにかつてあった学問所『東稷とうしやく』^{たけ}といえ、四百年の歴史を誇る和州日本でも有数の私立大学であり、本学が関西地方の首府である城州市に遷ってから、その跡地を付属の中学校が使っている。

その東稷中にしても、新政府が封建制を廃し、学歴社会を構築して以降は、城州市にある平安大学への進学率でつねに全国首位を誇る。ちなみに、中学校とは一般に尋常小学校を卒業した児童が大学進学ないし社会人になるまで五年間通う中等教育機関を指す。

彼女の住む寮自体は、多景島の南東に人工的に作られた埋め立て地にある。かつて大学だった時代に、学生の数が増えすぎたため校舎の増築が図られた。しかし、そもそも多景島は険しい崖壁とゴツゴツした岩山に囲まれ、校舎を新設できるような安定した土地が少ない。そのため新たに埋め立て地が作られたわけだが、そうこうするうちに全学ぐるみで城州市への移転が決まり、埋め立てた小島は

用済みとなつてしまった。けれど、すでに校舎の土台まで作られていたことから、見苦しいと感じた初代の校長が壊す代わりに計画されていた寮の半分をこの島に移設することにしたらしい。

結局そこは女子寮として落ち着いたわけだが、学校からの監視もろくにゆき届かず、いまや教師の代理とされる監督生を頂点として、上級生が思うままに下級生に対して幅を利かせる封建国家の様相を呈しているといったら言い過ぎだろうか。

寮から学校へは専用の船で行く。休日に本校と寮を結んでいる船は辰ノ時（八時）と申ノ時（四時）に一本ずつだけで、その時間もよく狂う（朝から酒を飲む操縦士がいい加減なのだ）。だから一刻近く待たされることもザラだが、たまには定刻通りに出船することもあるので待つ分にはちゃんと待たねばならない。それでも不満の声が聞かれることが少ないのは、こういうものかという諦念からすでにある種の大らかさを身につけている先輩方と、そうした先輩方の価値観にわずかでも立てつかないことが無言の鉄則となっている下級生とが、ともに操縦士に訴えることすらしないからだ。

「彰子さん、ちょっといいかしら」

渡し場で船を待つ途中、背後から声をかけられた。嫌な予感。振り返る気すらひける。けれど……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2997o/>

大華戦記

2010年10月16日00時47分発行